

舞台企画

『マケイヌバー』

朝倉薫演劇団 25 周年記念公演
マケイヌバー製作委員会

地下の 18 階段をくだったところにそのバーはあった——

2016 年 11 月 8 日（火）～ 18 日（日）上演

劇場 シアター風姿花伝（目白）

稽古 9 月下旬～

チケット発売 9 月上旬





■プロフィール

朝倉薫 あさくら かおる

1945 年 8 月 2 日、熊本県出身。

上京後は作家・里吉しげみのもとで演劇を学び、70 年代～ 80 年代は雑誌編集者、ライター、音楽プロデューサーを経験。

90 年代に朝倉薫劇団を旗揚げ。25 年にわたって新作を発表し続ける。

現在は作家、詩人であるほか、俳優、ミュージシャンとしても活動中。

『マケイヌバー』は、朝倉薫の人生が詰まった渾身の作品である。

お前のサティスファクションはどこにある！？

satisfaction

満足、(…を)満足させること、(…の)充足、(…に)満足すること、満足(感)、喜び、満足となるもの。

履行、賠償、皆済。

MAKE
WIN
BAR

■企画概要

九州の片田舎から身ひとつで上京し、40 年余年。私は、プロデューサーとして、作家として、ミュージシャンとして、そして劇団主宰として、この時代を駆け抜けてきました。

私が暮らしてきた東京という町、芸能界という小さな村には、たくさんの思い出が詰まっています。

さまざまな人々が、私の前を通り過ぎていきました。80 年代のバブル景気を受けて、その残り香を謳歌した 90 年代。苦境を乗り越えて新たな挑戦を試せた 00 年代。そして——長引く不況と経済格差による閉塞感に満ちた 10 年代——それらの時代に生きた人々の姿が、私の目にはまるで、三枚の絵画のように映るのです。

もし、この世の中に対して何か残せるものがあるのなら、私はこの絵画を残したい。

2020 年のオリンピックを控えて、景気復興に向けたさまざまな思惑のうごめく町、東京。

この 40 余年とこの町を総括する舞台を上演する最適な時期であると考えています。



朝倉薫演劇団 25 周年記念公演企画書

あらすじ

1996 年東京、雑居ビルの地下、13 階段を下ったところにそのバーはオープンした。オーナー兼店長は神戸城児。音楽プロデューサーとして一山当て、念願のカウンターバー「MAKE WIN BAR」を開いたのだ。客席であるカウンター内には憧れのバーテンダー山辺進がいる。神戸を祝いに、離婚した妻丹羽晴美、音楽評論家の村岡準やプロデューサーの松浦圭子、親友の脚本家里見良介や劇団時代の同窓生時種町子、そして……時種の付き人として田舎から出て来たばかりの 18 歳、伊武京子がやって来る。

2006 年東京、バーの看板は W が壊れ「MAKE IN BAR」になっている。怖いもの無しの躁病的空間だったバーも今は落ち着いて、10 周年を祝いにかつての友人たちが集まる。丹羽晴美は城児に呪いのような言葉を残して去っていく。時種町子は憎まれ役として売れっ子女優になり、連絡ドラマの脚本家として成功した里見良介の隣には、見事に女優として華開いた伊武京子が微笑んでいた。

2016 年東京、バーの看板は灯りを落としている。ホームレスとなった音楽評論家村岡が小銭をせびり、去る。神戸城児はバーテンの山辺に問う「俺は負けたのか？」そこへ、事故で片足を無くした伊武京子が降りてくる。10 年前、絶頂だったあの時、酔った京子は良介を乗せた車で崖に落ちた。良介はもういない。全てのわだかまりを許し合う二人。神戸城児は山辺に告げる。「俺は…負けてないよな」店の灯りを消し、13 階段を上って現実世界へ旅立つ神戸城児の足音が力強く闇に響く。

■役柄

神戸城児	28 才、38 才、48 才	バーのオーナー
時種町子	28 才、38 才、48 才	女優
伊武京子	18 才、28 才、38 才	女優
里見良介	28 才、38 才	脚本家
丹羽晴美	25 才、35 才	デザイナー
村岡準	38 才、48 才、58 才	音楽評論家
松浦圭子	48 才、58 才、68 才	プロデューサー
片山涼	18 才、28 才、30 才	アルバイト

オーディション開催予定 7 月上旬
応募希望者は、プロフィール、写真を同封のうえ
下記製作委員会住所にお送りください。
ギャランティ、チケットバックあり、ノルマなし。

制作：朝倉薫演劇団
制作協力：オフィスドール
製作 マケイヌバー製作委員会 〒164-0012 東京都中野区本町3-19-3-103
問い合わせ asakura@ellestaff.co.jp / 090-6796-7881